

筑波 しらぎく

医学教育と肉眼解剖実習

筑波大学医学医療系 教授

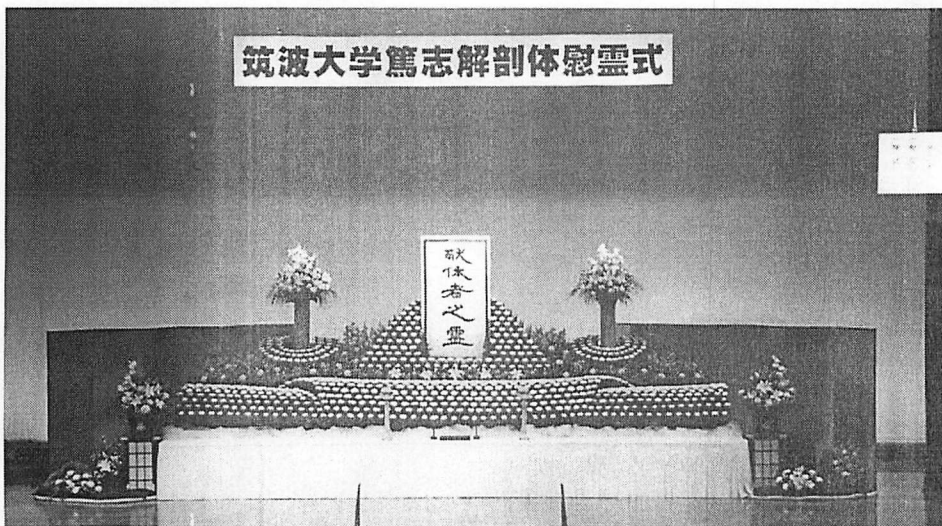
高橋 智

白菊会会員の皆様もご存知のように、筑波大学の前進は東京教育大学で、優れた教育法の開発は大学の伝統であり、常に最先端の教育改革を行なってきた。医学教育についても同様で、筑波大学医学専門学群（現在の医学群）開設当初より、現在でも行われている統合型カリキュラムや長期の臨床実習を国内で初めて導入するなど、最新の医学教育を実施して来ました。平成十六年度には、それまでの受動的な学習から参加型教育、発見的・選択的学習への改革を行いました。これは、教員が教壇から一方的に知識を教える受動的な教育を極力少

なくして、少人数の学生が自ら与えられた課題を解決していく、自己学習を中心とした教育方法への転換でした。実際には、病院を受診された患者さんの病歴などの情報が与えられ、そこから学生が自ら問題を抽出し、その問題の解決に必要な知識を検索・収集し、解決方法を導き出す「問題解決型」の学習方法です。このような学習により、学生の学習意欲を高めると同時に、医師や医学研究者にとって最も重要な問題解決能力を養うことができます。この能動的な学習方法の導入とともに、技能・態度も重視する教育に転換しました。臨床現場において知識はもちろん必要ですが、その知識を実践できる基本的な臨床技能を有していること、また患者さん中心の医療を実現できることが重要です。これらの技能・態度を習得するために、学生が実際

発行 筑波大学白菊会
茨城台1-1-1 市
天国王台1-1-1 事務室
解剖体事 029(853)3230
電話 029(853)3230
印刷 前田印刷株式会社
電話 029(875)6696

筑波大学篤志解剖体慰霊式



字歴 題略 紙者 表筆

今井 凌雪（いまいりょうせつ）
調 大正十一年十二月十九日生
立命館大学卒
前筑波大学教授（芸術専門学群）
日展評議員・日本書芸院常務理事・
雪心会主宰
朝日書道二十人展メンバー・日展文部大臣賞・
朝日書道賞・芸術院賞受賞

に模擬患者さんに対して医療面接を行う実習や、知識や技能の認証を受けた後で、ステューデント・ドクターとして医療チームの一員として仕事を分担する、より長期の病院実習を導入しました。これらの実習を通して、患者さんに信頼される技能・態度を有する医師を養成しています。更に、今年には日本医学教育評価機構（JACME）の「国際基準に基づく医学教育分野別認証」を取得し、国際基準に適合した教育カリキュラム



学長挨拶（代理教育担当副学長）

へのさらなる改革を行いました。その中で、卒業時に身に付けなければならない能力「コンピテンシー」を規定し、その能力を獲得するためにどのような教育を行うかを明確にした学習過程「マイルストーン」を作成しました。筑波大学医学群ではこのような様々な改革により、国際基準に適合したカリキュラムにより、問題解決能力および患者さんに信頼される技能・態度を有する医師および医学研究者の養成を行なっています。

筑波大学医学群では、常に新しい医学教育を目指していますが、何時の時代でも完全な教育法というものはありません、今後も様々な改革をしていく必要があると思います。しかしながら、様々な教育改革の中にあっても、肉眼解剖実習の重要性は変わらないと思います。なぜなら、肉眼解剖実習を通して学生が得るものは、解剖学的な知識のみならず、ご献体していただいたご遺体に接して初めて得られる医師、医療従事者になる者としての自覚であるからです。医師、医療従事者にとって、解剖実習で担当するご遺体は最初の「受

持患者さん」です。私自身は、顕微鏡を使う組織学を担当しており、現在は肉眼解剖実習に参加していませんが、学生時代の肉眼解剖実習を通して学んだこと、考えさせられたことはいまだに覚えており、医学研究者、教育者としての重要な部分を形成しています。今後も、時代の要請に応じた教育改革を行いながら、多くの方々のご協力のもとに、より良い医師、医療従事者、医学研究者の教育を行っていきたく思います。

追慕の辞

本日、ここに筑波大学篤志解剖体慰靈式が挙行されるにあたり、筑波大学白菊会会員を代表致しまして、謹んで「追慕の辞」を捧げます。

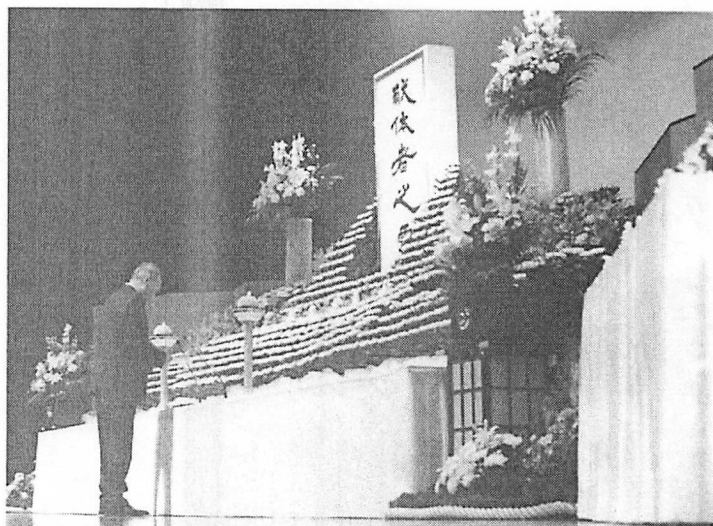
冒頭より、私事にて失礼申し上げます。

私は、本学、筑波大学の前身、東京教育大学を卒業後、企業勤務を経て筑波大学芸術学系の教員として二十四年間、奉職致しました。定年退職を間近

に突然、体調を崩し、悪性リンパ腫との告知を受けました。思いもよらぬ入院生活を余儀なくされ、主治医にご配慮いただき、抗癌剤治療後の高熱、副作用の合間を縫って筑波大学附属病院の病室より学内バスにて学生の待つ教室に向い、授業後、また病室に戻るという時期を半年程、くり返しました。その間、髄膜炎、肺炎も併発しました。ある日ボソボソと頭髪が抜け始め、鏡を見てびっくり。病院一階の理容店に駆け込み、一気にスキンヘッドにしてもらいました。教室に入るや否や学生たちは、「瞬静まり返り、どこからか「先生どうしたんですか」の声にザワつき始めました。私は持ち前の大声で、「アバンギャルド・ファッションだ。今流行っているんだぞ」と、咄嗟に心え、教室は笑いにつつまれ、いつもと変わらぬ空気に戻りました。退職の日まで、私のスキンヘッドに学生からは「先生、カッコいいです」など、とおだてられ、いつ時、病を忘れることもありました。

しかし、退職後、次の大学勤務が決まっていることを考えると、暗雲消えず、「無念」の二文字がぐるぐると脳裏に回りました。そんな中、当時の最新抗癌剤治療のR-CHOPにより、私の身体は徐々に回復に向かいました。経過観察を受けながら、筑波大学定年退職後、つくばエクスプレス、小田急線と片道二時間半の通勤を教員として、六年間無事勤務することができました。それは職場でもあった筑波大学の附属病院で、手厚い医療の恩恵を受けることができたからです。そして尊い生命を核とした医療の現場を垣間みることもできました。また私は学生時代、肺結核の手術を受けました。その際の輸血に因って二十年前C型肝炎ウイルスが検出され、以来、本学附属病院にて定期検査を続けてまいりました。昨年はじめ、高額の新治療薬「ハーボニー」のわずか三カ月服用だけで、その後の検査では、ウイルス検出せずの結果、をいただきました。ウイルスが除去されたことは私にとって夢のようでした。C型肝炎は私が生涯とともに共生していくもの、と覚悟していたからです。私は、医療の進歩の恩恵を次々と授かりました。

私の父は、昭和十九年、先の戦争にて南洋の島、サイパン島の隣、テナアン島で戦死致しました。私が二歳、妹が一歳でした。翌年昭和二十年八月十五日終戦の日も過ぎた後、白木の箱にたった一枚の紙片が戦死の報せであつた、と後に母から聞かされました。テナアン島は、日本軍が玉砕した後、この島から飛び立ったB-29が広島・長崎に原爆を投下、終戦の契機となった因縁の島でした。妹は親類の養女となり、母は私を連れて再婚しました。父



の戦死によって、もたらされた幼い自分を取り巻く環境の変化を私自身が知ったのは、大学入試後の事務手続きの際の戸籍謄本の記載に因るものでした。私は何も知らされず、十八歳にもなるまで、何も知らずに生きてきたのかと、無念の思いで心が潰れそうになったことは、今でも忘れられません。その無念の思いは、社会人となり結婚し、息子が生まれても消える事無く、私の中に燻りつづけました。父に会いに行かなければ、そう思い立った時、私は三十四歳になっていました。独りでテニアン島行きを決行しました。サイパン島までは行ったものの、台風の襲来でチャーターしたセスナ機が飛ばず、断念せざるをえませんでした。偶然にも翌年、「テニアン島に不戦の碑を建てる会」の呼びかけを知り、再びテニアンを目指すことができました。父の属していた軍司令部の跡から、数知れぬ遺骨や形をとどめぬ遺品を収集、島の白い石とサイパンから運んだセメントで捏ねた手作りの慰霊碑を建立しました。父の名前も記された戦没者名簿も碑の中に埋葬され、南国のめくるめく

太陽の下、鎮魂の祈りを捧げました。私はカロリナス岬の断崖に立ち、海に向かって、父の名を力いっぱい叫びました。南の青い空と海がかすみしました。

悪性リンパ腫という血液の癌を告知された折、どうして私が、という無念は、病の回復とともに次第に医療への感謝の思いと変わりました。またC型肝炎の治療への感謝、そして南海の孤島で戦死した父の魂に会えた感謝、これまで私が人生の受けた幾多の恩寵は、いずれは訪れる自身の死、死後のあり方を深く考えさせられるきっかけとなりました。折に触れ妻と語り、献体への決意を固め、筑波大学白菊会入会への至りとなりました。

本日、慰霊式に列席された若い医学生の皆様、看護・医療科学の学生の皆様は、日々、層の勉強に励まれ、やがて立派な医師、医療従事者として活躍なさることでしょう。

献体を全うなさった皆様の御霊の心を、どうか忘れることなく、ご精進なさって下さい。そして、無益な争いのない、平和な地球で、医療の進歩発展に尽くされることを願ってやみませ

ん。

献体の志を成願された白菊会、先人の皆様は、ご家族の深いご理解により、ご自身の死後のあり方を自身で決意されました。私共、現白菊会会員も、皆様と志を同じくし、献体させていただきますこと、ここにお誓い致します。

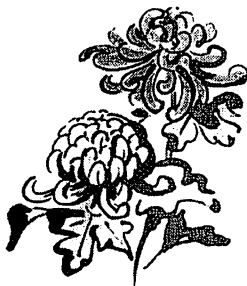
甚だ手前勝手に、私自身が献体の決意に至りました、道程の一端を申し上げます。

献体を成就された、皆様のご冥福を心よりお祈り申し上げ、「追慕の辞」とさせていただきます。

平成二十九年十月四日

筑波大学白菊会会員代表

三ツ井 秀樹



追慕の辞

本日、筑波大学篤志解剖体慰霊式が挙行されるにあたり、解剖実習のために御献体くださいました方々に、医学群学生を代表して謹んで追悼の言葉を捧げます。

私たちは、御献体くださいました白菊会員の皆様、及びご遺族の方々のご厚意により、今年の五月から六週間、解剖実習を行わせていただくことができました。

初めて御遺体に向かい、どのような実習を始めたのか、とても緊張していたせいかよく覚えていません。気づいたときには必死になって血管や神経の剖出を行っていました。そして、人間の体は一つとして同じものではなく、血管の走行や筋肉の形なども一人一人異なっているのだということを知りました。一方で、限られた時間の中で一つ一つ丁寧に、しかもなるべく素早く剖出をしなければならぬ、どの作業も気を抜くことはできない状況の中でも、毎日が発見と驚きの連続でした。その

ため、恥ずかしながら目の前の方がどういう人生を歩んできたのか、といったことを考える余裕がありませんでした。しかし、ある日を境にその視野が大きく広がりました。

中間試問を終え実習にもだいぶ慣れてきた頃、腹部を開いて臓器の位置を確認する作業の際、明らかに病変部位だとわかる所が目にとまりました。その時、指導教員がポツリと述べた言葉が今でも忘れられません。「この方はこれがここまで大きくなるまで頑張ってきたのだね」何気ない一言でしたが、その瞬間私は、目の前の方の生きてこられた年月がのしかかってくるような、そんな衝撃を覚えました。この方、ご家族の支えの中で送っていた、苦しい闘病生活の姿が目に見えませんでした。自分が今この手で解剖させていただいている方にも家族がいて友人がいて、そして長い人生の旅を終えた後、自らの御遺志で私たちのためにその御身体を医学に捧げてくださったという、その献身の心、ありがたさを改めて実感しました。感謝の気持ちが堰を切ったかのようにあふれ出し、私の心



を満たしていきました。その時、私は初めてこの方の命と向き合うことができました、そう感じました。一般の人が亡くなった方の御身体を傷つけることは法律で固く禁じられております。しかしながら、医学生は医学を学ぶために設備の整った教育機関で指導教員の指導の下行う場合にのみそれは許されます。私たち医学生は特別な許可を与えられて医学を学ばせていただいていることを再認識するとともに、世間から

の期待に応えるよう勉学に励まねばなりません。今回の実習を通して、人体の構造には一つとして不要なものはなく、それぞれが複雑に絡み合って機能していることを学ぶことができ、人体の神秘に驚かされました。そして、御遺体と向かい合うことで、将来、人の命を扱うことに対する責任を改めて実感しました。御献体くださいました皆様方とそのご遺族の方々に深く感謝申し上げます。今後良き医師になるために精進して参りますことをここに誓います。

最後になりましたが、御献体いただきました方々のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、肉親の死に際し、悲しみや苦しみの中、御献体にご理解くださり、ご協力していただいたご遺族の皆様への計り知れないご厚意に改めて感謝申し上げます。「追慕の辞」とさせていただきます。

平成二十九年十月四日

医学群 医学類 二年

福地晴彦

会員のみなさまからの便り

運が良かった三つの出来事

齊藤 岑生

一、三歳頃、二階の窓から裏道のコンクリートの上に頭から落ち、たまたまタライがあったので命拾いしたそうです。

二、六十二歳の時に、競馬馬を養成する美浦トレーニングセンターの社員食堂にパートで働いている時に、右目の上半分が暗くなり、たまたま、筑波大学病院から派遣されていた担当医が眼科の先生で、すぐ検査して頂き、網膜剥離と判り筑波大学病院に予約の手配をして頂きました。

三、昨年の夏に、かゝるい咳が出るようになりました。夏風邪かな・・・と思いましたが。普段でしたら近くの掛かりつけ医に行くのですが、何となく違和感を感じ、霞ヶ浦医療センターに「呼吸器内科」があることを知り、受診し、検査の結果「間質性肺炎」と診断され

ました。三カ月毎に検査する事になりました。今年の四月までの三回の検査では、目立った変化はありませんでした。

六月に入ってから、少し息苦しくなり、再検査して頂いた結果、肺の汚れが多くなつた事から、十九日に気道にカメラを通して検査し、そのままステロイド剤による治療のため入院しました。病状の悪化が早く見付かって良かったです。

約一カ月の入院で心穏やかな日々を過ごせましたし、人生を振り返る機会にもなりました。この間には西日本の甚大な豪雨災害があり、多くの命が奪われました。十一月に八十四才に成りますが、生きる意味も意識する様になりました。これからの余生を有意義に過ごしたいと強く思うようになりました。約二週間で生活習慣が変わることも知りました。食生活改善推進員として二年間学んだ経験を活かして、生活習慣を見直す事で地域に役立てないかと考えて居ります。

身近なことから恩返ししようと思えます。

ありがとう

佐久間 淳子

今年の夏は本当に暑いです。外に出られない程の暑さです。冷房のきいている部屋ですごし、体の調子を見て主人と買物に行ったりしています。十年ぐらいかけているメガネがあわなくなつたので、新しいメガネを買ってもらい、くつも買ってくれて嬉しいです。ありがとうございます。

ヘルパーが入ってくれ大変たすかるし、週一回訪問看護師が入って、ねたきりにならないようにと体操したり、歩きかたの練習をしてくれます。皆さんに良くして頂き、感謝、感謝で一杯です。

ペースメーカーの除細動器が入っています。来年の春頃入れかえになるようにいわれました。食べる物はなんでもおいしく食べられます。それは幸せです。

先の事はなにがあるかわかりませんが、一日、一日を悔いのないように充実した人生を過ごしていきたいと思えます。

長寿を生きて

迫田 トシ子

今日は一日私に付合つて欲しいと友人から話があり、何處へ行くのか見当もつかぬまま付いて行った処は筑波大学であった。其処で厳かに行われた慰霊祭を見聞きした私は深く感動した。献体と云う言葉を知つたのも初めてだった。早速、会員として入会させて頂こうと思つたが家族の諒解が必要との事で、帰宅後、長男に話したら、彼は「頑固なオフクロの事だから駄目だ」と云つても聞かないだろう」との意見。自分はそんなに頑固者だつたかなと過去を省りみながら承諾を得た。喜んで親友にその旨を話すと「おおいやだ。私は死んでも身体を切り刻まれたくないわ」と云う返答である。人によつて夫々の考え方が異なるものだと思つたが私の意志は変わらなかつた。親友はそれから五年後還らぬ人となつた。今でも彼女のきつい言葉は忘れない。入会を許可された私は余儀ない事情で

現在の住所に転居して二年余りになるが、穏やかに日々過ごしている。九十年と云う長寿を生きて来たのに何の取り得もなかつた自分の生き様を振り返りせめて多少なりとも医学のお役に立てればこの上ない本望である。併し、長年の生活を重ねていれば病に侵されたり、傷を受けたりと満身創痍の老女は折角の献体も役に立たないのではないかと案じる事もある。どうかその様な事が生じない様にと願っている。

死に逝く自分を思う

佐々木 利男

死に赴くことは、人としてこの世に生まれてから、必ず至る真実の世界だと思つていきます。

やがてやってくる死は、私には必然の摂理であり、辿るべき道程です。死を恐れ慄くことはありません。この現実の生が、余りにも過酷であり、非情過ぎます。何に将来希望を見出すか、といえは死後の世界しかないように思

います。生きることは、苦難の連続です。

死の病にとりつかれていると言われますが、そこにこそ平穏と安らぎがあるものと思います。

麻雀

鈴木雅子

マージャンは認知症予防や頭の体操に良く、老人ホーム等でも楽しんでい
る人が大勢いると言われる「健康マー
ジャン初心者体験講習会」をどんなも
のか見学に行った。今迄の人生で初め
てみる用具だった。「触ったことがなく
てもだんく、馴れて面白くなりますよ」
の言葉に何事も経験「まずはやってみ
か」と五月から月に二回ですが生徒四
人に先生二人のチームで教えて貰って
いる。ゲームのやり方まで進んだ。何
を残してどれを捨てるか未だ全々理解
出来ないけれど、家で一人ぶら／＼し
ているより楽しい。分からなくても生
かされている今を皆と一緒に笑い合っ

て楽しめたら最高の倅せです。

若き日々 気にもかけない

友と興じる 頭の体操

マージャンに

希望と共に生きる

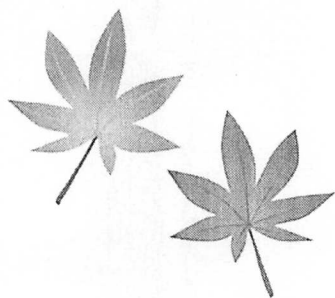
平石 賀須子

「しらぎく」掲載の為投稿を始めて丁
度十一年目の夏を迎える。製本され家
に郵送される頃は気候の良い秋だと思
う。毎朝目が覚めると「あ、今日も生
きてる」と感謝し、今ハマっている韓
ドラの時間帯を新聞にチェックし一日
を楽しむ。勿論不自由な足でも歩く様
にする為息子にシルバーカーを車に乗
せて貰い駐車場からスーパへ、自分
の食べたい物を買に行く。週三、四回
は行く様になっている。此の歳になると
楽しみと云っても人のお喋り位だが
そう云った場所にも一人では行けない。
誰かの車でのお世話になる有様。何年
か前の元気な身体に戻り度いが此の先

は衰えが待っているだけ。なるべく家
族に迷惑を掛けない様頑張っている。
無駄話が多くなつたが私の云い度い事
は毎年書く時、一番困る事は題名で、
悩みの一つだが今回の題名は偶然テレ
ビで見た未だ六十代にしか見えない
八十歳の加山雄三さんの「希望と共に
生きる、失望と共に朽ちる」の言葉を
一行お借りした。身体は朽ちても私は
生きる事を許される限り生き無理だと
思うが安らかな最期を迎えられたらと
願う私の希望である。

口丈は 元気ですよと

背を伸ばし



解剖実習を終えて

小野 侑太郎

解剖実習を終えて初めての経験で様々なことを考え、感じる事ができた。今でも、最初に解剖実習室に入った時の感覚は忘れられない。解剖実習が始まる前まで、様々な基礎医学の授業を受けてきたが、解剖を勉強してないとならないことも多かった。また、人体についての理解が深まっていなかったのも、今ひとつ医学という分野の勉強をしている実感が湧かなかつた記憶がある。そして、解剖実習が始まる前まで亡くなられた方の身体というものにもあまり触れる機会がなかった自分にとっては、解剖実習自体がどのようなものかわからず、亡くなられた方を解剖するという恐怖感と人体の仕組みを純粹に知りたいという好奇心が混じり合ったものであった。

そのような気持ちの中、最初に解剖実習室に入って、黙祷を終えて、ご献体くださった方の姿を見たとき、いよ

いよ解剖実習が始まるととても緊張していた。自分はそれまで人の死に対して向き合ったことがなかったので緊張も尚更であった。そして、最初の黙祷を終えてご献体くださった方を直接見たときこれから解剖をさせてもらうことに対する感謝と畏怖の念とこの方の最後のご遺志を受け止めて、しっかりと勉強しようという強い思いが込み上げてきたのを覚えている。本格的に解剖実習が始まり、実習の手引書に従って解剖を進めていく。解剖実習が始まってしばらくの頃は、実習が三限から夕方までビッシリで解剖を進めていくのが非常にきつかった。実習書に書いてある内容には簡単そうに見えても実際にその通りに進めてみると一時間以上かかることも頻繁にあった。そのような中でも人体の構造を肉眼で確認し割合を進めて行くと血管や神経の走行、そして筋肉の付き方が本当に細かく精密にできていることがよくわかってきた。また、神経や血管、筋肉、臓器は基本的な位置関係や行き先が共通してはいるが、その走行の仕方、大きさが個人によって微妙に異なっていた

り、既往歴によって違った部分が見られたりご遺体によって結構個性があることがよくわかった。人の構造は最初はたった一つの受精卵から始まり、成長していくことで本当に精密機械以上に精密にそして合理的な構造をしていることに対して、解剖を通して感動を覚えた。そのような生命の神秘を感じられた。そして何より、教科書の平面的な模式図では伝わりきらない立体的な部分が観察できたことで人体の構造に対する理解がとて深まった。実際に解剖していく中で、解剖に関しては素人である私は苦労することもたくさんあったが先生方にわからないところを聞いたり、班の人、自分の班以外の人に聞いたりしながら多くの人と協力して解剖の勉強をすることができた。実習が進むにつれて段々と難易度もあがり、覚えることも多かったが、自分が勉強すること一つ一つがとても重要であることがよく実感でき、とても集中して実習を行うことができた。

解剖が終わりに近づくにつれて、ご献体くださった方のお身体を隔々までしっかり目に焼き付けようという気持ち

ちがさらに強くなった。一カ月半に及ぶ解剖実習の間、ご献体くださった方と向き合っている中でご遺体が私に様々なことを教えてくれる先生のような存在になっていった。そのような中で解剖の最後の作業が終わった瞬間、長くて終わることがないと思っていた実習が終わるといふ達成感と人生の中で貴重な勉強ができたことに対する感謝の念を深く感じていた。解剖実習を終えて、自分は今まで経験したことがないような貴重な経験と知識を得ることができた。自分自身で献体を決意された方々のご遺志に報いることができるような解剖実習ができたかどうかはわからない。しかしながら、ご献体してくださった方が納得していただけるような医師になれるように努力していきたいと思う。

このような形で解剖実習を行い、実習を終えて一通り解剖学を学ぶことができた。納棺の時に先生が解剖実習を終えたことで私たちも医師の世界に踏み入れたのだとおっしゃっていた。先生がおっしゃったとおり、解剖実習をすることで人体の構造への理解を深め

ることができたのはもちろんだが、ご献体くださった方を解剖して行く過程で人の死とはなんなのか、逆に生とはどのようなものなのか深く考えることができた。実習ということだけではなくそういった考え方に関する部分でも人体の解剖を通してよりリアルに深く考えることができた。この解剖学を学んだことで今まで学んできた基礎医学の他の科目についての理解も深めることができた。これから先の臨床系の授業を行ううえで、さらに自分が医師となつて働いていくうえでこの解剖学で学んだことは非常に重要となります。献体に協力していただいた方々への感謝を胸に、この解剖学で学んだことをしっかりと自分に染み込ませ、ご献体された方々のご遺志に恥じない医師となれるようにこれから精一杯努力して行きたいと思う。

二〇一八年五月から六月の約一カ月半をかけて、私たち筑波大学医学群医学類二年生は解剖実習という貴重な経験をやる機会を得ることが出来ました。解剖実習は全く新しい経験の連続であった。そもそも亡くなった人を見るという経験がまず、初めてであった。自分の班のご遺体と六週間にわたって向き合ったわけであるが、今の医学はこういった人々の犠牲のうえにあるということを深く考えさせられた。特に納棺の際には、ご献体くださった方のご遺族の方々が用意された綺麗な棺を見て、それだけ愛された存在を私たち医学生、そしてこれからの医学の発展のために、解剖して良いと言ってくれたご遺志の尊さに感動した。自分はそのだけのご遺志に見合った学びができたのかということに関して不安になったが、そういう方々への恩は、私が将来医師となって助ける人々にお返しするものだと思った。そのために、これからは何事に対しても手を抜かず、色々な経験をしつつ学生生活を送る必要が

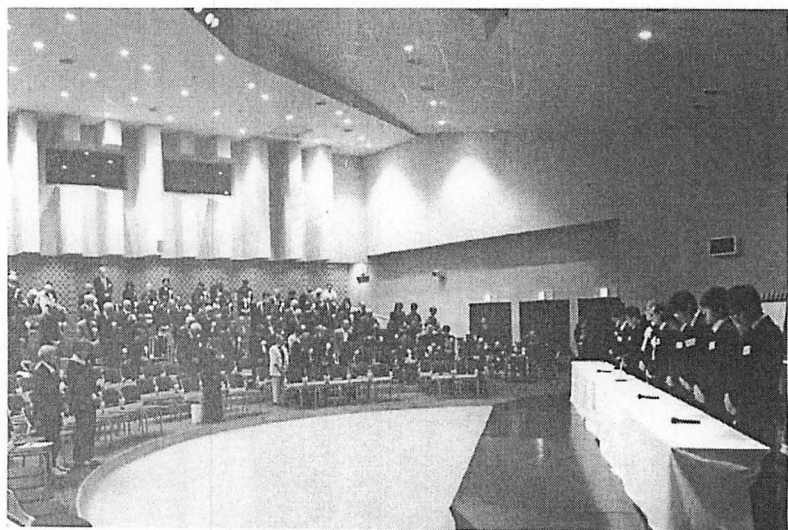
あると思った。

また、私たちはある程度完成された学問として医学を学ぶことができるが、医学で学ぶ事柄というのは大体が「簡単に目に見えてかつすぐに理解できるようなもの」ではないからこそ、それが学問として成立するまでには多くの人の犠牲と尊い御遺志があったはずである。私たちは多くの人々の命を救うという使命を持ってここにいるから、そういった犠牲のもとに学ぶことを許されているのであり、これから医学を学ぶにあたりそのことを忘れてはならないと思った。

次に、学問として解剖学から学んだことに関して書いておこうと思う。解剖学を勉強し終えて実感することは、解剖学は全ての医学の基礎となる学問であるということだ。私たちはこれまで基礎医学に分類される、生化学、組織学、分子細胞生物学、免疫学、感染生物学、生理学、薬理学を勉強してきた。それぞれ勉強する中で、もちろん個々で理解してきたことがあった。ただ、それらは抽象的に言うならば、知識の点であり、知識の点と点の間の

つながりというものはいまあまり感じられなかった。解剖学を終えて感じるのには、解剖学は医学教育の中心にあり、全ての基礎医学と通じるものがあるということである。例えば免疫学で学んだりリンパ腺にしても、そこで行われるリンパ球の分化にしても、そういった器官があること、そしてそういった現象があることは理解していた。それが、今回解剖学を学んだことで、そういった現象が人体そのものであるということを実感した。要するに、今回解剖学を学んだことで「身体の地図」が出来たように思う。様々な現象を、人体のものとして具体的にイメージ出来るようになったように思う。神経にしても、全身の血管にしても、大体の走行が頭に入った。そのことで、人体というものがどのようにして生きているのか、初めて理解することが出来たように思う。

特に感動したことがある。それに関して説明する前に、自分の班のご遺体に関して説明する。自分の班のご遺体には、腹腔動脈のあたりに異常所見が見られた。具体的に言うと、通常腹腔



動脈の分岐としては総肝動脈・脾動脈・左胃動脈の三つがあるが、自分の班のご遺体には総肝動脈が無く、代わりに、腹腔動脈から直接固有肝動脈が出ていた。そういった事情もあり、最初腹腔動脈の辺りをみた時には、何がどうなっているのか全くわからなかった。そこで首藤先生に助けを求めたところ、数分でこの分岐を説明して下さった。

その見事さに感動した。

将来医師となるには、こういった事態を自分で解決できる力が必要である。しかも、それが曖昧なものであつてはならないと実感した。医師となるからには、人の命を預かるからには、責任を持つて、全てを確実に、どんなことに対しても手を抜くことなく勉強していく必要があると思つた。

最後に、解剖実習を終えて、改めて医学は面白いと思つた。自分の興味がある分野を勉強できることは幸せであるし、勉強したいだけ勉強できるこの環境もなかなかないものである。これからも、この恵まれた状況を無駄にすることなく、常に周りに感謝し、将来の患者さんに恩返しをするべく、出来る限りの学びを積み重ねていきたいと思う。ご献体くださった方々の尊い御遺志・犠牲を忘れることなく、また、解剖実習を通して得た新鮮な驚きも忘れることなくいようと思う。

児 玉 はるか

私は、二〇一八年の五月から六月にかけて、約一カ月半の間、解剖実習を行った。まず初めに、かけがえのない人生を終えられ、医学生のためにお身体をご提供してくださった方々、そしてご家族の方々に感謝いたします。

初めて解剖実習室に入った時、医学生でありながらも、その異様な光景に驚いてしまった。自分の指定された席に座り、御遺体にかげられた覆いを外した時にやっと「これから私はこの方を解剖させていただくのだ」という実感がわいたことをよく覚えている。最初は、御遺体にメスを入れること自体、とても躊躇した。しかし、先生方が「お身体を提供してくださった方々は、今まさに、医学の未来に貢献したいという生前の願いをかなえられようとしている。尊敬の念を忘れずに、十分に学習させていただきなさい」というお言葉をかけてくださり、それからはむしろ、御遺体から学べることはすべて学ばせていただこうという姿勢で取り組むことができるようになった。解剖実

習が始まってからは毎日解剖実習室に通い、御遺体と向き合った。肉体的にも精神的にもつらい日々ではあつたが、実習が終わった今では、御遺体と毎日向き合い解剖させていただくという経験はおそらく二度とできない貴重な経験であつたと実感している。私はこの解剖実習を通して、「私は将来、医師になるのだ」という自覚を以前より強く持つことができたと思う。今までの座学での勉強では学習が直結する患者さんの存在が見えにくく、気づかぬうちにただ一つ一つのテストを合格するための勉強になってしまつていたような気がする。そのような中で、自分は医師になるのだという意識も薄れてしまつていた。解剖実習では、当然のことながら、何らかの死因でなくなつた御遺体を解剖させていただき、教科書に載っているものではなく実際の臓器を目で見ることができるので、この実習が将来の私の患者さんに直結するのだという実感を持って取り組めた。これからの学習の中でも、解剖実習を通して取り戻すことができたこの自覚を持って取り組んでいくことで、より深

く、熱心に学ぶことができると確信している。また、人体の構造はとても細かく、御遺体によっても一人一人違いがあつて教科書通りではないということも実感した。私は、他の班の御遺体も積極的に見せてもらい、自分の班の御遺体との違いを見つけることに努めた。自分の班の御遺体では見られない構造や、人工関節などの医療機器も実際に見ることもできた。このように、様々な特徴を持つ御遺体を見ていくうちに、教科書だけの勉強ではなく、実際に自分の目で見て学ぶことがとても重要だと気付いた。今まで、解剖実習以外の様々な実習をしていく中で、患者さんによって社会的な環境が異なるということとは意識していたが、患者さんのお身体も一人一人異なっていることはあまり自覚できていなかったように思う。社会的な環境に加えて、お身体が異なっているということを意識することによって、教科書通りの治療ではなく患者さんにあつた治療を選択することにつながっていくのではないかと思う。さらに、解剖実習のように実際の臓器や筋肉などの構造を見つつ、

その機能や構造ごとの繋がりを学ぶと、座学で勉強しているよりも、驚くほど速く、また実感を持つて勉強することができた。実際に自分の目で見て学習することは、学習効率やモチベーションの点においても重要であり、これからの勉強においてもこの点を意識して学習していきたいと思う。

今後も、医学生として、また将来の医学を担う一員として今回の実習で得た知識や経験を無駄にすることが無いよう、一層勉強に励んでいきたい。また、このような貴重な体験をさせていただいたこと、お身体を提供してくださった故人に今一度心よりお礼を申し上げます。

櫻井 ひかり

一カ月半に渡る解剖実習が終わった。まず始めに思うのは、自らのお身体を提供してくださった方とそのご遺族への感謝である。

実習初日、解剖実習室に足を踏み入れた時、これから解剖が始まるのだと

実感した。各解剖台に一体ずつある、ビニールに包まれた御遺体を目にし、とても緊張した。最初にビニールを開いたときは手が震え、また御遺体の顔を直視することができなかった。御遺体の足に包帯を巻くために触れたとき、生体と完全に同じというわけではないが、それでも人の肌の感触と、その重さに驚いた。そして同時に、これから自分が解剖させていただくのは一人の人間であるということ強く思った。

実習が進むにつれて、自分が解剖実習に慣れてきたことを感じた。朝起きて、時間に間に合うように学校に行き、白衣を着て実習室に入り、開始時間まで友達と少し話しながら待ち、実習が始まるのが日常になりつつあった。次第に、実習初日の緊張感が薄れていることに気づき、そのことが少し怖くなった。医師は、このように色々な感覚が一般の人とずれていってしまうのではないかと思った。そして、あの最初の日の気持ちはずっと持ち続けたいし、そうしなければならぬと思った。

解剖実習は、とても得られるものが大きかった。普段、座学の授業はなん

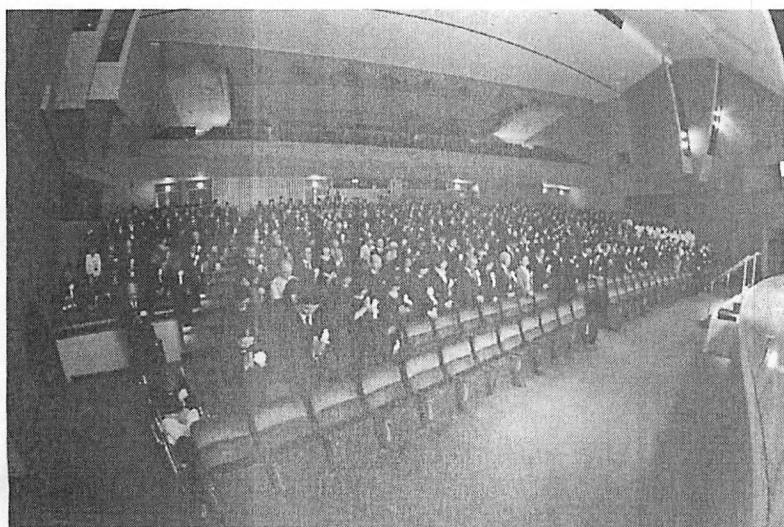
となく椅子に座って話を聞いていることも多かったが、解剖実習では自分で予習・復習をしつかりとして、毎回の実習に臨まないと勉強にならないということを痛感した。自分が今割出しているのはなんとという神経で、どこからどこに向かって走行し、どんな働きをしているのかということが分かっている時とそうでない時では、割出のしやすさも、また、その後の記憶への残り方も全然違った。毎回、予習をして実習に臨み、四、五時間実習があり、帰ったらその日の復習と次の日の予習をする生活は、大変ではあったが、日々知識が増えていくことを実感し、充実していた。人間の体は、筋肉や脂肪の付き方が人それぞれであるのは勿論、さらに、血管や神経の走行もかなり違いがあり、驚きの連続だった。予習をするときは図譜で構造を確認していたが、やはりそれは平面的に描かれているため、実際に見てみると想定より深いところにあつたり、上下関係が異なったりすることが度々あり、自分で割出して実物を見ることの大切さを実感した。特にそれが顕著であつたのは頭部の解

剖で、神経の所在もその走行も、実習室で見て初めて納得することが多かった。そうやって納得したものは時に記憶が鮮明で、その後の復習に大いに助けとなった。

実習最終日にした納棺の準備が強く印象に残っている。まず、前日に棺に添えるお花を買いに行ったのだが、その時あの方にはどのようなお花が似合うのかと考え、華やかなものを作っていた。また、感謝の気持ちが大きくあつたので、花言葉が「感謝」である花を入れてもらった。そして、納棺当日は今までの感謝を込めて特に丁寧に準備をした。それは班の人達も同じだったようで、みんな真剣な顔つきで作業していた。特に、棺に触れる時は全員が自然に手袋を外していたのが印象的だった。御遺体を棺に入れて、素手でお花を添え、班員全員で蓋を閉めた。誰かがそうしようと言ったのではなく、自然とそうだったので、みんな同じ考えなんだと思つた。最後に増田先生の指揮の下、全員で黙祷した際、一カ月半お世話になつた御献体くださった方への感謝が込み上げてきた。

この方がいらつしやつたから、私はこうして勉強することができて医師になれるのだから、この方への感謝の気持ちを絶対に忘れないようにしようと心に誓つた。

解剖学は、臨床を学ぶにあたって必須であるというのは、実習期間中に何度も先生方がおっしゃっていたが、本当にその通りだと思う。今後勉強して



いくうえでも、さらにその先に医師になつてからも全ての基礎になる勉強をしたのだと思うと少し感慨深い。解剖実習を終えて、自分は医師になるということを改めて考え、それは多くの人に助けられてからこそできることなのだと思う。御献体してください、そのお身体を通して数多くのことを学ばせてくださった方に恥ずかしくないように、これからたゆまず勉強し、医師になる義務があるのだと痛感している。医師になるための勉強は、自分のためだけにするのではないと、入学以降何度か言われてきたが、その通りであると思う。将来の自分の患者のためにも、さらに、顔も名前も知らないのに、自分に期待し、支えてくださったっている方のためにも勉強しなければならぬ。

私は身近な人の死を経験したことなく、この解剖で初めて御遺体というものを実際に見た。さらに、偶然ではあるが、実習期間中に祖母が亡くなったこともあり、生きていることや死ぬことについてたくさん考えた。自分の中で明確な答えは出ていないが、それでもいいと思う気持ちもある。人の生

死について、それを当たり前のこととして扱うのではなく、どういうことなのか、ずっと考え続ける医師になりたと思う。

佐藤 恵

解剖実習は、医学部で行われている教育といえればと行って多くの人が挙げられるものであると思う。私も医学部に入れば解剖をするのだと理解して入学し、どのような実習なのかを楽しみにしていた。解剖実習を終えた今思うのは、実習前の私は全く解剖実習の意味を理解していなかったということである。

実習前から、始まるその日まで、私は自分が六週間の実習を無事に終えられるだろうか、もうすぐご遺体と対面するのだという緊張や不安、少しの恐怖も感じていた。その時の私にあったのは、自分のことに対する懸念だけであつた。そして初めて実習室に足を踏み入れた時、目に入つたのは、実習室に一杯に置かれた実習台の上の、白い布にくるまれたご遺体であつた。今ま

で誰かのご遺体を目にしたことがなかった私にはかなりの衝撃で、一言も発することができずに自分の席についた。実習が始まる時間になり、班員五人で緊張しながら白い布をめくり、これから六週間教えていただくご遺体と対面した。笑い皺のたくさんある、とても優しそうな方だつた。その時初めて、解剖させていただくご遺体が、長い人生を歩まれた、自分と同じ人間なのだと感じた。今までは漠然とした対象のようにとらえていたものが、急に現実味を帯び、背筋が自然とのび、指先が冷たくなるほどの緊張感を感じた。そして、先生から実際にメスを入れてくださいと指示があつた。私はメスを持ったまま、しばらく動けなかつた。きれいなご遺体に自分が踏み込む心の準備ができていなかったのだ。班員がみんな動き始め、私もやらなければと意を決し、ご遺体にメスを入れた。一度作業ができるようになると、その後はその日のノルマを達成することに必死で、夢中になって作業をしていて、気が付いたら終了時刻となつていた。その日の実習後、私は先生が実習前に

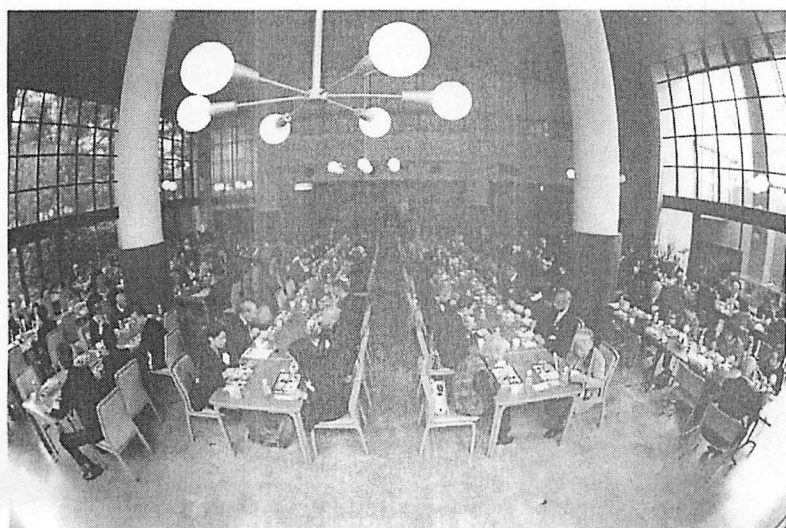
おっしゃっていただいたことを思い出した。「献体を決意された方々は、まだ十代やそこらの未熟な君たちに、自分の体をどうか医学の勉強に役立てて下さい」という思いでご献体をされている」という言葉だ。自分が実習で目の前にしているご遺体が、自分と同じ人間なのだと実感した後、その言葉を思うと本当に身の引き締まる思いになった。自分だったら同じことを決意できるだろうかと考え、その決断がどれほど重いものなのか、実際にその決断をされた方々には到底及ばないとはわかりつつも、その重みをひしと感じた。そして、そこまでの想いを私たち筑波大学の医学生に託して下さっている方々に対し、恥ずかしくない自分でいたいと強く思った。そのために自分ができることは、実習の際に自分の班のご遺体で見させていただけられるものは全て見て、記憶に残し、解剖学の知識を確かなものにする事だと思ひ、それからの実習では、時間と自らの技術が許す限り、すべてのものを解剖しよう、そして家ではその日得たものを記憶するためにできるだけ解剖学の勉強に時間を割こ

うと決意した。

実習を続けていくと、実習が始まる前には思いもよらなかった発見が多々あった。ご遺体によって、血管や神経の走行、筋の発達、臓器の大きさなど、違いがすごく沢山あったのだ。臓器や血管などには、ほとんどの班で病変があった。体は、人間が生きている間、常に向き合っていかなければならないものであり、それ故私たちの人生を刻んできたものであると思う。私たちは、自分に向き合っている方のお名前を知らないし、どういった人生を歩まれてきた方なのかも知らない。しかし、解剖を通して、お体に刻まれたその方の人生を垣間見ることが出来る。臨床医は患者さんと会話をかわしてその方と向き合うが、解剖というのは、お体に刻まれたその方の人生を見させていたたくという、臨床とは別の観点からその方と向き合うものなのだと感じた。私は、実習が始まる前はただ単にご遺体を解剖していく中で、アトラスに書いてあるものを自分の目で見るということが解剖実習だと思っていた。しかし、実習が進むにつれて、そのような

自分はなんて未熟だったのかと思うようになった。医師は患者さんの人生と向き合わなければならないと理解はしていたが、実際にご遺体を通してその方の人生にふれると、人生と向き合うということがいかに重い意味を持つのかを知らなかったのだ。

実習を通して、本当に沢山のことを学ばせていただいたと思う。頭にだいた



いの人体の 3D 地図が描けるようになり、体がどのように動くのかなどもある程度はイメージできるようになった。そして何より、一人の人と向き合うという事を教えていただいた。その意味や重みを今回知ることができたのは、今後臨床のコースを進むうえで、大きな糧となると思う。実習を終えた今、私が抱えているのは、ご献体をしてくださった方々への深い感謝である。私が今まで述べてきた本当にたくさんの学びを得ることができたのはご献体くださった方のおかげであり、本当に深い感謝を感じている。ご献体を決意された方その深い想いに自分が応えられたのか自信はないけれど、実習を通して、可能な限り学ばせていただいたと思っている。改めまして、私に医学生として、そしてゆくゆくは医師として過ごすうえで、ご献体くださった方々は、本当に大切な学びをたくさん授けてくださいました。本当にありがとうございます。ございました。

陶山里佳

私は解剖実習を終えた今、深く思うことが二つある。一つは人体の神秘、もう一つは御献体くださった方への感謝だ。

私たちは食事・運動・睡眠などを行いながら毎日を過ごしている。それらの行動に人間の身体がどう働いているのか、私たち医学生は昨年から学んできた。私はこれまでの学習でそれらを概念としては理解をしていたと思う。しかし、今回の解剖実習でそれらの知識を合わせ、やっと身体の働きの全体像を掴み取ることができたように感じた。例えば、私たちが身体を動かす時、脳からシグナルが出てそれが神経を介して伝えられ、様々な化学反応が起こり筋肉が動く、という一連の流れが身体の中で起こる。その体内での動きは学んできたが、解剖をするまでは神経や筋肉などを見たことがなかったため、私たち人間の体内で起こっていることという実感がいまひとつ湧かなかった。解剖実習でこの実感が湧いたとともに、臓器や血管を実際に見て触って、私た

ちの身体のなかで沢山の物質が働くことで毎日を生きているということを感じ、とても感動した。また解剖中には、実際の身体が教科書と違うという例が多く見られた。血管や神経の走行などが挙げられる。そのような身体の多様性を実際に見て、生物はすごいと改めて思った。もともと小さな受精卵から、私たちの個体が、それも一つずつ特徴を持って形成されたという神秘に魅了された。

御献体くださった方への感謝は、毎日解剖を進めていく中ですつとできたとつもりだったが、最後まで実習を終えて、毎日の黙祷では足りないほどだと改めて思う。御献体してくださったお身体がなければ私たち医学生は実際の人体の構造を見ることはできず、教科書だけの知識でこれからの勉強を進めることになっただろう。実際の人体の内部構造は教科書に書かれているものとは違い、多様性に満ちているし、それが病気の状態であればなおさらだろうと思う。それをよく知らずに医師になるのは、とても怖いことだと思う。解剖実習でこれを学ぶことができたの

は、本当に御献体くださった方のおかげである。また、実習をしている中で、御献体くださった方がどのように人生を生きてこられて、どうして献体しようと考えられたのか、非常に興味があった。もちろん直接話を聞くことはできないため想像することしかできないが、そのように相手のことを想像することは、医師として患者と接する際にも大切なことなのではないかと思う。そういうことを改めて気づかせてもらった御献体くださった方には、感謝してもしきれない。直接感謝を伝えることはできないが、この感謝を絶対に忘れずにこれから知識をたくさん得て、医師になっていきたい。

たった六週間の実習だったが、今まで受けた講義と比べても内容が非常に濃く、得られた知識もとても多かった。「百聞は一見に如かず」という言葉もある通り、実際に見て自分の手を動かして体験して得た知識は、教科書や講義で得られないものがきつとあったと思う。この実習を無事に終えることができたのは、教えてくださった先生方と一緒に実習した班員たちのおかげだ

う。多くの人に支えられて終了することができたこの実習を糧にして、いつそう医学の勉強に邁進していきたいと思う。

蓮池 佑紀味

初めてご遺体と対面した日の気持ち悪い出す。解剖実習がどういった様子か、どのようなことに気づいたらよいかなど先輩からうかがい、自分の中でのイメージは出来ていたものの、実際にご遺体と対面した時、自らの覚悟に甘い部分があったと身に迫るものがあった。解剖実習で学ぶべきことは多くあり、それを中途半端にすることは医師を志すものとしてしてはならないのももちろん、ご献体をしてくださった方の気持ちを踏みにじる行為だと感じ、気が引き締まった。

私は昨年から自宅通学を続け、入学前に比べ体力がついたと実感していたが、解剖実習は体力と気力を大いに要するものであった。毎日その日の範囲の予習をし、実習中は集中して解剖に



取り組み、実習が終わればその日の復習をする。そしてまた次の日の予習をし、というリズムは出来ていても、実習自体に自分が思っているよりも精神力を要し、帰ってからは眠気を訴える体を奮い起こして勉強に取り組んだ。ご献体をしてくださった方の気持ちに恥じない行為をしたいという思いもあったが、加えて、今自分が学んでい

ることとそれに取り組む姿勢は将来の医師としての自分に直結するという意識が行動に変化をもたらしたようにも思う。

解剖実習では人体の基本的な構造を自らの目で見たが、人の数だけ個人差があり、また変異もあるということに改めて感じた。手引きやアトラスに載っている図は一例にすぎず、最初のころはその図の通りでないと見つけれないなど不器用な状態であったが、次第に剖出した構造の特徴からそれが何か同定していくといったことも出来るようになった。将来医師になったとき受診してくれる患者さんも、同じ部位に同じ病気を発症しているからといって何もかも構造が同じということとは決していない。何科の医師になりたかという明確な像はまだないが、たとえば自分が将来外科になって手術をする時も、CTやMRIの画像から診断する時も、解剖実習から得た知識が役に立つということは断言できる。

始まった頃は長いように思えた六週間も、終えてみるとあっという間だったようにも感じる。やらなければなら

ないことが多くあって追われていた印象もあるが、それ以上にこの経験を通して得たものが多くある濃密な六週間であった。将来選ぶ道にもよるが、解剖に関わることは今後もうない可能性が高い。六週間ともに試行錯誤しながら実習に取り組んだ班員に、時に励まし、時に叱咤しながら熱意を持ってご指導してくださった教員の皆様へ感謝を申し上げたい。そして誰よりも、この解剖実習のためにご献体してくださった皆様に、最大の師であった皆様に感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。

長谷川 光 汰

解剖実習初日、解剖台の上に安置されたご遺体を前に、私は、「ついに始まるんだな」と、身の引き締まる思いでいた。解剖実習は、大学医学部における六年間の教育課程において、自らの手で一から系統解剖を行うことのできる唯一の機会であり、また、臨床の理解に必要な不可欠な人体の諸構造を把握

する絶好の機会でもある。私は、このような機会を得ることができ、嬉しく思う反面、死者に対する畏怖の念を拭い去ることができずにいた。

しかし、実習の進行とともに、それは次第にご遺体に対する感謝の気持ちへと変わっていった。血管や神経の走行、筋肉の起始・停止を始めとする人体の諸構造の理解には、教科書を通した理解も必要であるが、それだけでは不十分であり、ご遺体を通した理解が不可欠である。それは、実物であるご遺体から得られる情報量が、教科書の紙面から得られる情報量を遙かに大きく上回っているからである。例えば、血管や神経の走行には、破格と呼ばれる正常範囲内での変異が見られることがあり、教科書通りになっていないと限らない。また、ほとんどのご遺体にはがんや心筋梗塞などに起因する何らかの異常所見や、人工弁や人工関節などの治療痕が認められるが、これらも教科書からは得ることのできない貴重な情報であり、大変勉強になった。もちろん、ほとんどの構造は教科書通りになっているが、写真や模式図で見る

のと実物で見るのとは全く違った経験であり、正しい理解には後者が必要不可欠である。最近では、タブレット端末上で人体の諸構造を三次元的に表示できるアプリなども利用でき、以前よりも手軽に利用できる情報源は増えた。しかし、自ら手を動かしてご遺体を解剖することで得た経験、身につけた知識は何物にも代えがたい。生きた知識を身につけるためには、ご遺体を使った実習が必要不可欠であると感した。人体は血管、神経、リンパ管、結合組織などが縦横無尽に張り巡らされており、その隙間を脂肪組織が埋めるといふ非常に入り組んだ構造となっており、目的の構造物に到達するのは容易なことではない。そのため、目的の構造物を剖出できたときの喜びはひとしおである。

解剖実習を通して人体の精緻な構造に触れるたびに、生命の尊さ、素晴らしさを身をもって感じる事ができた。また、解剖実習という貴重で有意義な時間が私に与えられているのは、自らのお体を提供してくださった方、並びにそのご遺族の方の尊いご意志のおかげ

げなのであるということに改めて実感し、感謝の気持ちで胸が一杯になった。今後は、この解剖実習で学んだことを基礎として着実に知識を増やし、医学、医療の発展に貢献できる人材となるべく励みたい。

福元 崇人

実習初日、午前中に講義室で解剖実習についての説明を受けている時、私には「これから解剖実習が始まる」という実感が全くありませんでした。解剖実習、それはご遺体にメスを入れ人体の構造を観察するという日常とはかけ離れたもの。頭では分かっているもののこの時の私は、献体とは何か、解剖とは何か、死とは何か…これから自分が目にするもの、経験するものがどんなものか、本当の意味では分かっていたなかつたのだと思います。

その日の午後、やはりいまひとつ実感の無いまま、私は解剖実習室に入りました。しかし実習室に入った途端、私の意識は大きく変わりました。私は

その瞬間を今でも鮮明に覚えています。白衣に身をまとった同級生が行き交う間に、白い布に包まれ白菊が供えられたご遺体が一定の間隔に並んでいました。この光景を見た瞬間、私は医学生としての実感、人体の構造に対する興味、そして死と向き合う恐怖、様々な感情に心が押しつぶされそうになりました。

同級生全員で黙祷を捧げた後、白い布をめくりご遺体と対面しました。その時に見たご遺体のお顔は、当たり前ながら私たち生きた人間と何一つ変わらない「人の顔」でした。お顔を拝見して、様々な思いが頭の中に浮かびました。この方はどのような人生を過ごしたのか、何故ご献体に協力してくださったのか、ご遺族はどんな気持ちでこの方の帰りを待っているのか…今考えても答は分かりません。しかしその時、私は自分が何をすべきか、この実習を通して何を学ぶべきなのか、ご遺体から伝わってきたような気がしていました。

それからの六週間はあっという間に過ぎていきました。毎日の実習に加え

帰宅後には予習復習と想像以上に多忙な日々でしたが、人体の構造の複雑さ、精密さに触れ、毎日が発見と驚きの連続でした。教科書通りでない構造を見つけた時には、自分の知識不足なのか、解剖手技の問題か、ご遺体特有の変異か、病変なのか、様々な可能性を追求することでより理解を深めることができました。

実習の最終日、私はとても不思議な感情をいだいていました。実習をやり切った達成感と共に、それよりも明らかに大きな後悔に似た感情があったのです。「今後の人生、解剖を行うことはきつとない」そう思うと、今まで懸命に取り組んだにも関わらず、何かやり残したことがあるように思えて仕方がありませんでした。そこで私は実習の最後に他の班を周り、今まで自分が解剖して見てきたご遺体と他のご遺体とを比較しました。より多くのご遺体を見ることで、全く同じ構造はもちろん、どちらも「人」であるにもかかわらず異なっている構造、変異や病変を発見でき、改めて人体の構造の不思議さ、難しさを実感しました。

実習中、解剖学の先生が「この解剖

実習での『先生』とは本当は私たち大学の教員ではなくて、今皆さんの目の前にいらっしやるご献体された皆様ですよ」と教えてくださいました。この言葉の通り、ご遺体は私に多くのことを教えてくださいました。解剖学とは、一般的に言えば肉眼で見ることのできる人体の構造を学ぶ学問です。しかし実習ではそれ以外にも、命の尊さや死とは何か、言葉や文字で学ぶよりもはるかによく学ぶことができました。それは今後医師として、そして人として生きていくうえで決して欠かせないものです。今回の実習で得たことを忘れず今後の人生に活かしていきたいと思っています。

最後に、今回の解剖実習にあたり、お身体を提供してくださいました皆様、ご遺族の皆様、そして熱心にご指導くださいました解剖学教室の先生方、また共に実習に取り組んだ同級生の皆さんに心から感謝するとともに、改めてご献体くださいました皆様のご冥福をお祈りいたします。

山城 泰介

私は、解剖実習を終えて感じたことが二つある。

一つ目は、医学という分野は、医師や研究者などの専門家だけでなく、献体者や研究の被験者など実に多くの方々の協力があって発展してきたということである。今回、筑波大学で行われた解剖実習においては、約三十体のご遺体を解剖させていただいたが、これが毎年、全国の医学部で行われていることを考えると非常に多くのご遺体が必要になる。それだけ多くの方々の思いを背負っていることを考えると初めは気が重かったが、実習を通じて知識的な面はもちろん、精神的な面においても確かな成長にかえることができたとように思う。実習では人体の構造について、実際に自分の手でご遺体を解剖していきながら学ぶことによって、座学では絶対に味わうことのできない緊張感の中で強烈な経験として学習することができた。また、解剖実習中もご献体された方が生前どういう気持ちで自らのお体を提供してくださる決意



をしたのか、もし自分が献体する立場だったらどのような姿勢で解剖実習に臨んでほしいと思うのか、といったようなことを考える機会が多かった。ご遺体の提供に協力することは、本人はもちろんだがご遺族にとっても大変勇気のいることであり、「医療の発展に役立ててほしい」という強い思いで協力していただいているのだと思う。医学

は物理学や化学などと異なり、人を対象とする学問である以上、将来医療に携わる私たちは、このような多くの方々に育てていただいているという謙虚な姿勢で学習しなければならぬと強く感じた。

二つ目は、チーム内での自分の役割を理解して実行することは大切だということである。私たちのグループは四人だったが、実習の初めは人体にメスを入れる精神的な辛さや、慣れない作業に全員があたふたし、その日のノルマに達しないことが多かった。しかし、実習が進むにつれてお互いに知識面、技術面、精神面でそれぞれカバーしあうことができるようになり、実習をスムーズに進めることができたうえ、グループ内でコミュニケーションが活発になったことでチームワークを深めることができた。医師になると、チームを組んで医療行為をすることがほとんどであるが、そのようなときには自分の役割は何で、チームのメンバーに対してどのような働きかけをすれば患者さんにとってベストの医療を提供できるのか、ということを考えて実行する

ことが非常に大切になってくる。その点で解剖実習は、毎日それぞれが任せられる内容が決まっており、最低限その内容については責任をもってやり遂げるといふサイクルを繰り返していく中で、チーム内での自分の役割を明確にして取り組むことができたので貴重な経験だったと思う。

最後に、人体解剖という貴重な機会にご協力してくださった関係者の方々に深く感謝したい。今回の実習をもって授業で人体解剖を行う機会はなくなくなってしまいが、今後の臨床科目を学習していく中で、本実習で学んだことを再度理解し直すことを怠らず、最終的には人体構造のマップが頭の中で描けるようなレベルになるまで精進したいと思う。



新会員

会員番号	氏名
二二三三六	佐藤 安子
二二三三七	藤村 美智子
二二三三八	宮内 正治
二二三三九	宮内 イキ
二二四〇	池田 静子
二二四一	鈴木 主計
二二四二	安孫子 武弘
二二四三	安孫子 弘子
二二四四	鈴木 和英
二二四五	鈴木 恵美子
二二四六	廣瀬 節男
二二四七	平塚 覚一
二二四八	平塚 千恵子
二二四九	長澤 直美
二二五〇	小松崎 信明
二二五一	遠藤 裕
二二五二	石堂 和子
二二五三	後藤 久仁子
二二五四	大塚 純子
二二五五	足立 毅
二二五六	足立 靖子

二二五七	小野寺 百里
二二五八	笹沼 かよ子
二二五九	長谷川 八重
二二六〇	青木 英子
二二六一	佐藤 則子
二二六二	安藤 文也
二二六三	中村 忠
二二六四	中村 桂子
二二六五	松田 長人
二二六六	出野 一江
二二六七	澤田 恵子
二二六八	高田 英昭
二二六九	松岡 由美
二二七〇	川瀬 和子
二二七一	吉田 一男
二二七二	篠原 慶邦
二二七三	篠原 敏子
二二七四	立川 裕
二二七五	大沢 均
二二七六	新見 幸助
二二七七	今井 辰機
二二七八	天野 とめ
二二七九	宮久保 典子
二二八〇	内埜 通男
二二八一	坂本 久美子
二二八二	橋本 弘

二二八三	渡辺 勝男
二二八四	井能 幸子
二二八五	鈴木 たか子
二二八六	宮本 堅壽
二二八七	堀 芙佐子
二二八八	菊地 まさ子
二二八九	梅澤 まさ子
二二九〇	乾 順彦
二二九一	乾 淳子
二二九二	小田嶋 禮子

成願会員

会員番号	氏名	成願年月日
一七二五	故 安藤 翠二九	九・一〇
九二九	故 鈴木さだの二九	九・一四
一〇八三	故 橋詰 幸子二九	九・一八
一一三五	故 中西ミヨ子二九	九・二二
一五三五	故 海老原たか二九	一〇・九
一四五九	故 市塚登美子二九	一〇・一四
一三五二	故 三田 郁子二九	一一・一一
六三〇	故 大槻 ハル二九	一一・九
一五〇八	故 留巢 正衛二九	一一・五
一一三九	故 小林 千代三〇	一・四
一四七七	故 中山 惠子三〇	一・九
一九四六	故 郡司みつ江三〇	一・九
一五七	故 佐々木正祥三〇	一・四
七三三	故 吉永 甫枝三〇	一・六
六四五	故 小泉 明子三〇	一・三
一九九	故 橋本 肥三〇	一・六
一五三	故 内田壽美子三〇	二・八
一四二	故 椎原かつよ三〇	二・九
五八五	故 塚本日出夫三〇	三・二
二〇六〇	故 宗像マサ子三〇	三・五
七〇一	故 齊木 禮子三〇	三・五
一一三二	故 森川小江子三〇	三・八
八三二	故 大塚よしの三〇	三・一〇
二〇六一	故 滑川 義一三〇	三・一六
一八七	故 平松 貞三〇	四・一九
四二二	故 成相 正三〇	五・二四
一七六七	故 北爪 光幸三〇	六・二〇
〇八七	故 宮本 きみ三〇	七・八
一八二七	故 大俗ヒテ子三〇	七・一六
一四九六	故 小室 哲男三〇	七・二三



筑波大学白菊会 規約

(名称及び事務所)

第一条 本会は筑波大学白菊会と称し、その事務所を筑波大学医学群内に置く。

(目的)

第二条 本会は会員の親睦と献体運動の推進を図ると共に、医学の発展と人類の福祉に貢献するために、会員の遺体を筑波大学医学群に寄贈することを目的とする。

(事業)

第三条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1、 会員の親睦
- 2、 献体運動の推進
- 3、 会報の発行
- 4、 その他、本会の目的を達成するために必要な事業

(会員)

第四条 本会の目的及び事業に賛同し、自らの遺体を寄贈する目的を持って入会を申し出た者を会員とする。ただし、家族、またはこれと同様の者の同意を得た者でなければならない。会員は本人の希望により退会することができる。

(役員)

第五条 本会に次の役員を置く。

- 1、 会長 1 名、理事長 1 名、理事若干名、幹事若干名
- 2、 会長は、筑波大学医学群長が務める。
- 3、 理事は、筑波大学医学群解剖学担当の教員が務め、理事長の選出は、理事の互選による。
- 4、 会長は本会を代表し、会務を総理する。
- 5、 理事長は会務を統括し、理事は本会の運営に関して協議し会務を分担する。
- 6、 幹事は筑波大学医学群の事務職員の中から、会長が委嘱し、庶務及び会計を処理する。

(任期)

第六条 役員は任期は 2 年とする。但し、再任を妨げない。

(顧問)

第七条 本会に顧問若干名を置くことができる。顧問は、理事会の議決により、会長がこれを委嘱する。その任期は 1 年とする。但し、再任を妨げない。

(会議)

第八条 総会は、年 1 回会長が召集し、事業報告及び会員の意見交換の場とする。

(会計年度)

第九条 本会の会計年度は、4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までとする。

(経費)

第十条 本会の経費は、寄付その他の収入をもってこれに充てる。

(補則)

第十一条 この会則に定めるものの他、本会の運営に関して必要な事項は、理事の同意を得て会長が定める。

(感謝状)

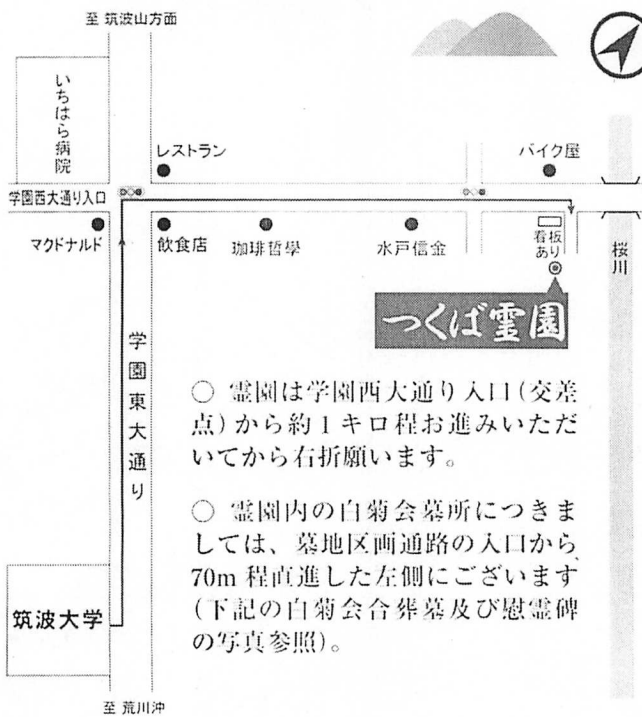
第十二条 献体された遺族に対し、会長（医学群長）より感謝状を交付する。

付則

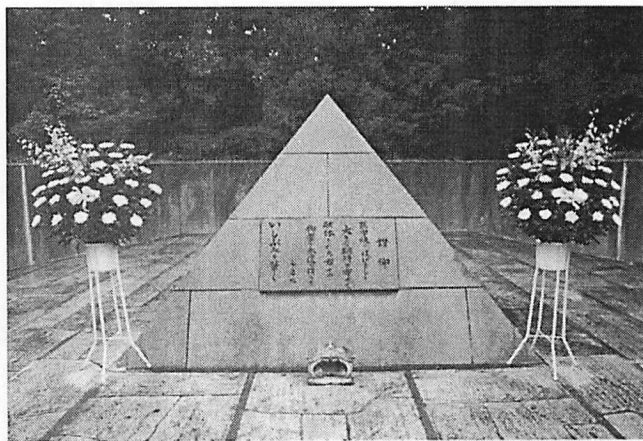
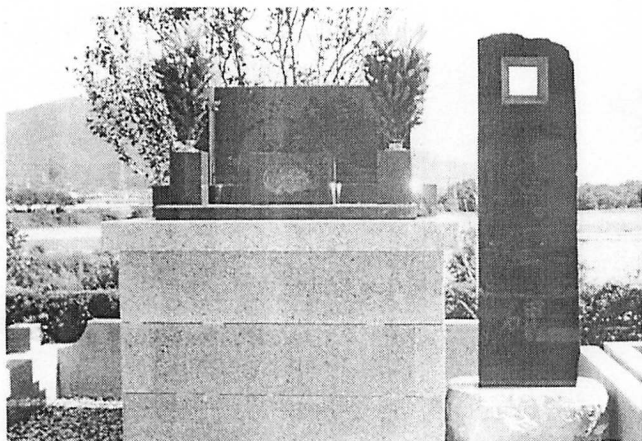
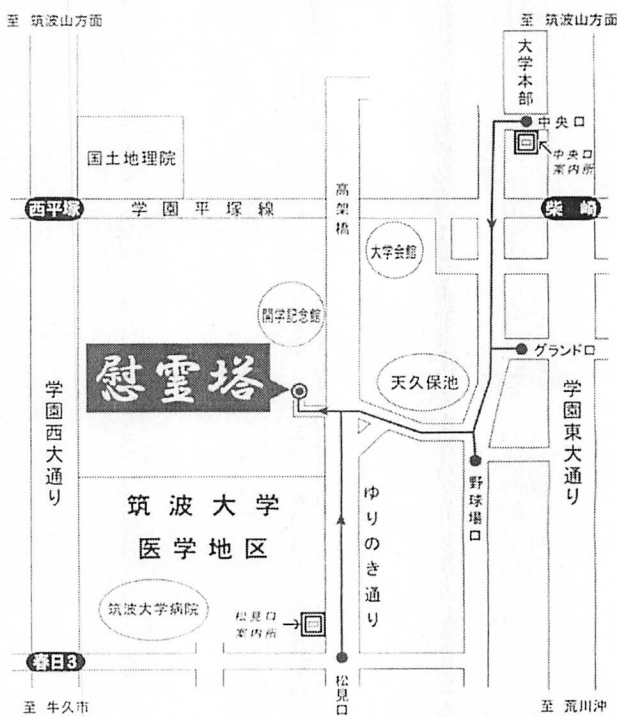
この規約は、昭和 58 年 4 月 1 日から施行する。

この改正規約は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

筑波大学白菊会慰霊碑案内図



筑波大学白菊会慰霊塔案内図



(交通ご案内)

車利用の場合(常磐自動車道)

- 上浦北ICから15分
- 桜土浦ICから23分

高速バス(つくば号)利用の場合

- 東京駅八重洲南1(2のりば)から「筑波大学行き」乗車～つくばセンターまで70分

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口(3のりば) 関東鉄道バス「つくばセンター行き」乗車～つくばセンターで下記のつくばバスに乗り継ぎ
- つくばエクスプレス(TX)つくば駅隣接のつくばセンター(3のりば) つくばバス・北部シャトル「筑波山行き」乗車～「大徳窓口センター」下車

(所在地) 〒300-3253 茨城県つくば市大曾根根本333

(お問い合わせ) 029(864)6606

・お車でお越しの際は、上記の所在地あるいは電話番号をナビにご入力願います

(交通ご案内)

車利用の場合(常磐自動車道)

- 上浦北ICから20分
- 桜土浦ICから20分

高速バス(つくば号)利用の場合

- 東京駅八重洲南1(2のりば)から「筑波大学行き」乗車～つくばセンターまで70分

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口(3のりば) 関東鉄道バス「筑波大学中央行き」乗車～「平砂学生宿舎前」下車
- つくばエクスプレス(TX)つくば駅隣接のつくばセンター(6のりば) 関東鉄道バス「筑波大学中央行き」または大学循環バス(右回り)乗車～「平砂学生宿舎前」下車

お願い

ご住所を変更された場合は、新しい住所を白菊会事務局（電話 〇二九―八五三―三三三三）へお知らせ下さい。住所が分からずご連絡がとれないケースが増えております。



「会員が亡くなられた時に、していただくこと」
ご遺族の方々へのお願いです

一、ご遺体を大学へ引渡す時刻の打合わせ

まずご遺族の間で次のことをお決めになって下さい。

(1) お通夜をせずに直ちに引渡す

(2) お通夜をしてから引渡す

(3) お通夜をして告別式をすませてから引渡す

右のうちどれかにきまりましたならば筑波大学献体事務室の担当者（電話 〇二九・八五三・三三三〇）と、ご遺体引渡し場所と時刻を打合わせください。休日・夜間のお引取は大鷗社（電話 〇二九・八二二・八三三三）に直接連絡下さい。

ご遺体の輸送は大学がお引受けし、原則として自動車がお迎えにまいりますし、(1)の場合には必要があれば大学からお棺を持参することになっていきますがこの点も打合わせて下さい。

(注) ご遺体の大学への引渡しは二十四時間を超えるときはお棺の中へドライアイスを入れ、ご遺体の保存に御留意下さい。

二、必要書類の用意

(1) 「埋火葬許可証」を急いでお取り下さい。これは医師の死亡診断書をそえて市町村役場へ「死亡届」を出すときにも使えます。

(2) 「埋火葬許可証」の記入の際、火葬場所は県内の方は最寄りの火葬場所をご記入願います。尚、県外の方は土浦市田中二丁目一六番三三三号、土浦市営斎場、火葬年月日は一年後として下さい。

(3) 「解剖に関する遺族の承諾書」については大学から書式を持参しますので、ご署名とご捺印をお願いいたします。